無意識から生成される空想にみる孤独感に関する一考察
—心理臨床実践の素材から—

根　本　真　弓

I　はじめに

心の病や心の問題を抱えた様々なクライエントと出会い、心の苦悩や痛みに耳を傾け、心を寄り添わせていく時、表現されたその語りだけではなく、むしろ語られなかった言葉の間や余韻に、あるいは沈黙の中に、激しい怒りの中に、孤独さゆえの寂しさや哀しさを感じることは多い。それは、時に不安や恐怖と結びついた感情として表現され、また心の奥深くに静かに横たわる思いとして伝わってくるものである。我々臨床心理士のもとを訪れるクライエントの多くは、人と人との関係の中で喪失や傷を抱えており、人への不信感や疑惑、空虚さや絶望の中にいて、淋しく独りぼっちであると感じている人たちである。そして繋がる対象を希求しつつも、対象と繋がることに不安や恐れを感じている人たちであるといえるのではないだろうか。そのような体験の中に見いだされる孤独感は、彼らの心の内奥に通底する感情であろうと思われる。

実際、クライエントが孤独体験を語る時、絶望や空虚感、あるいは不安や恐怖と結びついた感情として断片的に表現されたり、行動化や症状として表されることも多いのである。クライエントの精神内界で生じている孤独感を理解するためには、クライエントの言動の背後で活発に動いている空想やイメージを手がかりとして、セラピストが思いを巡らせ、推し量ることでしか、その孤独の深淵に触れることができない事例も多いのではないだろうか。そしてその空想をセラピストが理解し、クライエントの痛みや苦しみを受け取り、クライエントを抱える事ができた時、幾ばくかクライエントの孤独は癒され、和らいだものになるのではないかと推考する。もちろん、孤独感だけがクライエントの抱える問題だとは考えていない。しかし、独りであることに圧倒されるのか、拒絶するのか、否認するのか、あるいは受け入れるのか、楽しむのかといった、孤独への対応の如何が、人が人として生きていくうえでの、そして死んでいく上での大きなテーマであり、これが人の心の病や不適応、病理等に大きく影響するものと考えられる。

本稿では、筆者の臨床実践体験を基に、あるセッションでのクライエントの語りを臨床素材として取りあげ、無意識から生成される空想を通して見えてくる人間の孤独体験について考えたい。

II　孤独感の諸相：先行研究における孤独感理解

孤独の語源については、孟子の「梁恵王篇下」の「老いて子なきを独といい、幼にして父なきを弧という」（其波，1990）からきていると言われている。古くから哲学、文学などのテーマとして、数多くの先賢が様々な角度から理論を展開し、また作品を生み出しているのであるが、「孤独の問題は哲学の根本問題と思われる」（Berdyaev,N.A.，1934）と言われるように、孤独が人間存在のあり方と深く関わり、また科学的に捉えられるものでもない主観的な問題であるため、

概念化は難しいと言われており（Fromm-Reichmann, 1959)、また、統一された定義もなされていないようである。

この様な現状の中で、これまでの孤独感研究を大きく分類すると、孤独を社会的・対人的側面から、外的世界との関わりを通して論じていく視点をもつ社会学、社会心理学の観点と、実存的、病理的側面から内的世界との関わりに重心を置く臨床心理学、精神医学の観点とにわけられるようである。

前者のPeplau&Perlman（1982）は、社会科学的な立場から、測定法、タイプ、理論、社会行動、社会適応、ライフサイクル、救済など様々な角度からみた孤独感の研究成果について紹介しており、多くの示唆を与えてくれるが、「孤独は社会的関係の欠如に起因する」という立場が貫かれている。同様の立場から清水（1999）は、「現代社会は孤独の苦悩よりも孤独の不能」の時代であるとして、透明人間や分身といったキーワードをもとに孤独感について論じている。また、調査研究をもとに、他者理解・共感の有無を縦軸に、個別性への気づきの有無を横軸に孤独感を類型化した落合（1999）は、青年期の孤独感は「人と親密な関係を持とうとする志向性をもっているのに、それをうまく実現できず、人との理解・共感が難しいと思う状態で生じる感情」であり、「疎外感、不安感、自己嫌悪、劣等感と類似した感情である」と述べている。

後者の臨床心理学、精神医学の領域では、Furomm-Reichmann（前出）が、真の孤独は、「精神病的状態へと導くもの」「精神病状態に備わったもの」であり、語ることも出来ないくらい恐ろしいものとして体験されると述べている。また、Klein（1963）は、母親に対して感じた破壊的衝動が母親に投影され、迫害的なものと感じることから派生する妄想的危険や、破壊衝動と愛の衝動を統合する時に生じる苦痛な感情が孤独として体験され、それが統合失調症や抑鬱的な病気の要素になると論じている。Moustakas（1972）は、実存的孤独を病理的側面と肯定的側面の両方から論じている。病理的側面については、人が裏切り、拒絶、別離、病、死、危機などによって自己感覚ばかりでなく、世界そのものが一変するほど打ちのめされたように体験する状態を「引き裂かれた孤独」呼び、それが精神病理と結びつくと述べている。また、実存的孤独への防衛として絶えず他人との関わりを求め、本質的な孤独を打ち消そうとする孤独への不安も病理と繋がるという。一方肯定的側面について、人や自然、宇宙の究極の真理に触れ、存在の調和と全体性の中に憩う心安らかな状態を「静寂にひとり身を任せた孤独」として取りあげ、それは新しい自己の創造に結びつくと言う。これについてはStorr（1988）も「孤独になる能力は貴重な資質であり、それによって感情の深淵に触れることや、喪失体験と折り合うこと、物の見方を変えることができる」と述べ、孤独が人間の創造を支える想像力の発達を促し、その創造的想像力の発達が治癒の機能も果たすと考えている。

孤独の治療機序に関して、前述した社会科学のPeplau&Perlmanは、社会的スキルの訓練、孤独を感じる人の自滅的思考を認知的－行動的セラピーで改善する方法などを提示している。精神医学では、Klein（前出）が「良い対象の内在化」の必要性を論じ、また、Winnicott（1958）は「他の人が一緒にいるときにもった"一人でいる"（to be alone）という体験」を通して、「一人でいられる能力」を獲得することが重要であると論じている。

以上のように、孤独感を外的現実から見るか、内的現実から見るかといった観点の違いによって、その捉え方は随分異なったものになっているように思われるが、外的世界で生じたことは内

的世界にも影響を及ぼし、内的世界の有り様が外界の見え方を変えてしまうように、両者は有機的に繋がっている。しかしながら、この2つの研究が描き出す孤独感は、質的に大きな違いがあるのも事実である。その違いについて筆者は、研究対象の違いが大きいのではないかと考えている。それは病体水準の違いと言い換えても良いかもしれない。つまり、社会学・社会心理学は、言語で捉えられる比較的病態水準の良い対象の孤独について論じており、臨床心理学・精神医学は、言語で捉えられない、あるいは捉えにくい、病理の重い対象の孤独について論じている為、孤独感という同じ軸上の事を語っているのであるが、意識レベルに近い孤独と、無意識レベルに近い孤独といったように、見ている対象や病理の深さの違いが語り口の違いをもたらしたのではないかと思われる。

従来の研究の多くは、調査研究やライフサイクルから見た孤独感研究がほとんどで、臨床実践体験から孤独感について論じたものはほとんど無いのが現状である。そこで本研究では、この言語によって語りにくい水準の孤独が、寂しさとして心に感じられるように変化した臨床実践体験について報告し、孤独感について考えようと思う。しかし、クライエントの内界で生じている、言語に絶する孤独体験や孤独状態をどの様にして捉えればよいのであろうか。先行研究でも、その点に関する方法論は具体的には論じられていない。それはおそらく、クライエントの在りようや、発する声、語りの断片、クライエントとセラピストの間に流れる空気、クライエントから投げ込まれた情動をセラピストが感じ取る事、言葉を喋れない赤ん坊の心を慮る母親のような感じ取り方、セラピスト－クライエントの関係性、そしてクライエントがセラピストに対して抱く意識的、無意識的空想といった主観的体験からしか、その孤独体験や孤独状況を捉えることが難しいからであろう。それこそが、孤独感は主観的な問題で概念化が難しいといわれる所以であろうと思われるが、本稿ではそこに少しでも接近したいと考えている。

クライエントの有り様からセラピストが受け取る情報は上述したように様々であるが、言語で捉えにくい孤独感は無意識の内容と深く関わると思われる。故に本稿では、孤独体験、孤独状況の背後にあり、クライエントの心を激しく動かしてはいるが言語としては表現し難く、身体的衝動や本能的な欲求を内包する、「無意識から生成される空想」について考えることを通して、孤独感の問題を捉え直すことを目的とする。また、人が孤独を抱えつつ生きていくためには何が必要なのかといったことについても、心理臨床学的観点から考えたい。

尚、ここでいう無意識から生成される空想とは、Isaacs（1948）の論じる「空想は、無意識的な精神過程の一次的な内容物」であり、イド衝動と自我メカニズムを繋ぐものという概念に依拠している。また、孤独感の定義について本稿では、上述した先行研究も踏まえ、言語で捉えられる孤独、捉えられない孤独の両方を内包した、孤独体験や孤独状態にある時の、内的な心の動き（心的現象）を孤独感として捉えて論じていきたい。

その方法として、筆者の臨床体験を基に、言葉で捉えられない水準の孤独体験や孤独状況が、情緒を伴って感じられる孤独へと質的に変化した臨床素材を提示し、この孤独感を捉える一つの手法として「無意識の空想」という心的メカニズムを用いて考察することとした。

III　臨床素材

次に、筆者がこのテーマについて考えるきっかけとなった、女性クライエントの事例を提示し、

孤独体験について考えると共に、無意識から生成される空想が孤独感とどの様に関わるのかについて検討を加えてみたい。なお、ここでは心的メカニズムに焦点を当てて論じており、事例研究そのものを行うことを目的とはしていない。10年以上前の複数の事例を基に、孤独体験が語られたセッションを抽出し、本稿がテーマとしている孤独感と無意識的空想について特に印象深かったものを統合して、本筋に影響が無い程度に加工修正したものを臨床素材とした。尚、現実の事例は、医療との連携の下に行われていたことを付記しておく。以下、クライエントをAと表記し、発言は「」で示す。またセラピストはThとし、発言は＜＞とする。

＜セッション1＞

【この頃のセラピーでは、Thに対して愛着を向けるセッションと怒りと怖れをぶつけるセッションが交互に生じており、Aの依存欲求と激しい攻撃性によって面接場面は非常に緊迫したものになっていた。丁度その頃、面接の休みをめぐって以下のようなやりとりがあった。

Aは、「どうして私はこんなに孤独なん、Thの時間を奪いたい！甘えたい！」「殺してやりたい！取り付きたい！飲み殺したい！犯し殺したい！」と激しく孤独を訴え、話もとりとめもないものになった。また鼻血を瞼や口に塗り、尿の中に垂らした鼻血や下痢便を舐めるという行為があった事が語られ、「孤独だったのにストーブも買ってくれない！お母さんにもなってくれない！セックスしてくれない！」と泣きわめき、半身の痺れという転換ヒステリー症状を呈した。

そしてその症状から回復した後に、「Thを責めたのは、すごい甘えと切断、Thを刺してその血を飲んで飛び退いたイメージだった」と語った。】

＜セッション2＞

【セッション1から2年以上経った頃のあるセッションである。この頃のAは、Thに向けていていた愛着と怒りの感情を、インターネット上の対象Bに振りかえ、一般に公開されたBのホームページの内容をAのメールへの返事だと受け取っていた。また出会ったこともないBに、愛着を向けるかと思えば馬鹿にされたと怒り出すなど、現実の対象として対応しており、自他未分化で妄想的な世界が展開していた。

Thが面接の休みを伝えると、「休みがあるから甘えを貯めていこう」と寝っ転がってThの靴に触れたり、休んだことを責めて靴を叩いたりしながらも、甘えと怒りを以前よりは和らいだかたちで表現するようになった。そしてThが面接室での飲食を注意した事をきっかけに、泣き喚いてThを責め、価値引き下げをした後で、Thとのそれまでの出来事を振り返り、濡れた服で面接にきたAにThが使っていた電器ストーブを貸し与えたことなど、温もりや暖かさを感じるような良い体験を思い出して泣いた。そして、「現実にBと自分に交流はない。イメージでつながりがあると思っていることが問題」と語った。「Bから切り捨てられると思うとセックスしていることを想像してしまう」と言うAに、Thが＜相手とつながりたいのね＞と返すと、「捨てられるのを補償してくっつこうとするのかも」と語り、「イメージのThはいつも側にいてくれる。イメージが遠のくとThが知らない人になった気がする。独りぼっちで寄る辺がない」とさめざめと泣いた。】

以上2つのセッションから見えてきた、無意識から生成された空想と孤独感の関わりについて、その内容から抽出した「Thの不在」「空想の対象」「ひとりでいられる能力」をキーワードとして考察する。

1，Thの不在と孤独感

面接の休みというThの不在をめぐってAの語った言葉の背後に、Aの心に生じた意識的・無意識的空想が表れていると思われるので、そこからAの空想について考えたい。

セッション1でAの語った、「Thの時間を奪いたい！」「甘えたい！」「殺してやりたい！」という言葉は、AがThとの間で時間と空間を共にできなかった思いや、甘えたい気持があったのにそれを与えないばかりか、Aを見捨てて何処かに行ってしまったThへの怒りの表現なのだろうと理解した。また、「孤独だったのにストーブも買ってくれない！」「お母さんにもなってくれない！」というのは、Thの不在によって、暖かさや温もりが失われたことを伝えようとしているのであり、小さな子どもが母親を求めるように、Thに対して母性的な関わりを求めているのであろうと思われた。

しかし、「取り付きたい！」「飲み殺したい！」「犯し殺したい！」「セックスしてくれない！」というAの言葉は、Aの心の叫びとしてThである筆者の心を揺り動かし、辛く切ない思いにさせられたが、何故「取り付きたい、飲み殺したい」になるのだろうか。「刺し殺したい、殴り殺したい」といった、怒りの対象を自分から切り捨て、排除したいというのではなく、殺したいほどの怒りを感じながらも、取り付いたり、飲み込むことで自分の中に取り入れようとする語りは、その時のThにはそのまま受け取ることが難しく、ただAの怒りに圧倒されていた。Thに対して徐々に愛着を向け始めた時にThの不在が生じたため、その事がAを恐怖に陥れ、愛着と怒りとが入り交じった混乱状態にさせてしまったのであろうか。この混乱状態の中で断片的に表現された内容から、Aの心で何が起きているのかについて理解しようとした時、言葉のその奥に意識を超えたA独自の世界、つまり「無意識から生成される空想の世界」があるのではないかと考えるようになったのである。そこでThは、母親が言葉によって思いを伝えられない赤ん坊の心の内側に思いをめぐらせ、その気持ちを汲もうとするように、Aの内的世界について、彼女の語った言葉の断片と、Thの不在という現実状況から連想を働かせることにした。この時A子の内奥に動いていた無意識的空想とは、Thとの分離を否認するために、愛着の対象であるThを食って自分のものとして取り入れ一体化し、何時までも保持するという具象的なイメージだったのではないだろうか。ただ単に殺してしまうと、愛着対象でもあるThがいなくなるので、Thを失わないためには、取り付き、飲み込むことで自分の中に取り入れる必要があったのではないかと思われる。「セックスしてくれない、犯し殺したい」という言葉についても、その具象的イメージの背後にあるAの情動は、Thの不在（喪失）に対して、セックスによる「結合、つながり」を求めたのであろう。また、「犯し殺す」は、非常に暴力的ではあるが、AがThの膣からThの中に入りたい、つまり一体化したい気持の表れであろうと考えた。上述してきたように、Thの不在に対するAの情動の激しさに圧倒されながらも、Aの言葉の背後にある無意識の空想について理解することを通して、Aの心の内奥にあるのではないかと思われる情動を、僅かばかりでも感じ取ることが可能になったのである。

しかし、何故「食ったり、犯したり、飲み込んだり、セックスすること」を空想し、激しく他者との一体化や取り入れ、繋がりを求めるのであろうか。Aは他者に対して愛着を感じる事を恐れていたのであるが、セラピーの進展にともなって、徐々にThに愛着や依存欲求を向ける一方でそれは否認され、激しい怒りとしてThに投げこまれていた。はからずもその時にThの不在が

生じたため、否認という防衛が使えなくなり、Thとの繋がりや愛着を求める気持に直面させられる体験になったのではないだろうか。つまりThの不在が、Thという対象とのつながりをいかに希求しているかということをAに実感させ、それがAの孤独感を一層強めることになったものと思われる。そして繋がる対象であるThがいないことが「絶望や空虚さの中に独り置き去りにされることへの恐怖」としてAには体験されたのではないかと推考する。そしてAはその孤独状況を回避する為に上述したような、愛着と怒りが入り交じった様々な空想を生成したものと思われた。人は誰か、あるいは何かと繋がらないで、全く一人では生きられない存在なのかもしれない。鼻血を瞼や口に塗り、尿の中に垂らした鼻血や下利便を舐めるという行為は、「精神病者が現実の喪失を補填するために、エスの拘束という犠牲をはらわずに、もっと自分本位の方法で新しい現実を創造し、見捨てた現実と同じような衝動をもはや起こさないようにする」(Freud,1924) 行為と同様の反応であり、自らの空想と現実を混同するほどの病態の重さを示しているものと思われた。孤独の苦痛を体験をしないために、いつでも取り出せるようにThを自分の身体の中に取り入たいのであるが、それが得られないので自分で自分を取り入れることによって、自己対象と一体化するという幻想を創りだし、独りぼっちの状態を回避しようとしたのであろう。この精神病的反応は、Thとの関係性の中で生じたものであり、Thの不在がここまでAを追い込んでしまった事にThは強い衝撃を受け、罪悪感を感じ胸が痛んだ。次のセッションの来談についてThは危惧したが、Aは休むことなく来談し、精神病的な世界は消失していた。Thは胸をなで下ろし安堵たのであるが、このことは、この精神病的反応がTh-Clの関係性の中で生じたことを物語っており、その為関係性が維持されると、その反応も消失したものと思われた。面接の休みは避けられないこともあるが、その事の重みをもっと留意すべきであったと反省している。

セッション2では、Thの不在に対して、Aは寝っ転がってThの靴に触れるなど退行し、「甘えを貯めていこう」と率直に依存欲求を表現した。またThの不在を責めることはあっても、セッション1のように激しく、現実と混同された空想が語られることも無くなった。同じ対象喪失に対して、セッション1と2でAの対応が異なるということは、Aの精神内界が質的に変化したことを示していると思われた。セッション2になって、AがThの不在に耐えられたのは、「Thからも過剰に愛されて一体みたいに思っていた」と語ったように、Aは無意識的空想の世界でThとの一体感を感じ、Aを過剰に愛する良い対象としてThを保持し続けていた為に、孤独感が減じられていた面が考えられよう。

しかし何よりも大きいのはセッション2で、Thが注意をしたことに対してAがThを責めた後で、それまでのThとの関係を振り返り、Thの関わりの暖かさや温もりの体験を思い出せたことである。心の中に暖かさや温もりを与えてくれる良い対象としてのThがいることに気づいたAは、外的対象としてのThが不在であっても全く一人ぼっちではなく、内的対象としてのThと共にあると体験できるようになり、それがAの孤独感を和らげたのであろう。「甘えを溜められる」心的空間がAの心の中に生じ、そこにThを保持できるようになったとも言えるのではないだろうか。

そしてそれが、無意識的な空想の対象としてのThやBの存在を、「イメージ（妄想的)」と感じることを可能にし、現実の世界と「イメージ（妄想的)」の世界を分化して語れるようになった

ものと思われる。しかし、「イメージのThはいつも側にいてくれる。イメージが遠のくとThが知らない人になった気がする」というように、Aの生み出した空想の対象としてのThを手放すまでには至っていない。けれども「独りぼっちで寄る辺がない」としみじみと語れるようになったところに、Aの孤独感が、セッション1のような破壊的・妄想的なものから、抑うつ的で和らいだものに変化したことや、Aの成長をみてとることができるであろう。

人は、他者に対して愛着をもち、繋がりを感じているからこそ、その繋がりが切れた時、あるいは切れたと感じた時、孤独になる。そしてその孤独が、誰ともつながることができないと思うほど絶望的な孤独であると感じられた時、その孤独の恐ろしさは想像を絶するものなのであろう。

Searles.（1960）は孤独の恐ろしさについて、他者との関係を見いだすことに絶望しきっている統合失調症患者が、窓の外の木と一体になろうとしていたことを取りあげ、「人間としての同一性を失うことよりも恐ろしく耐え難いものである」と述べているが、Aもその恐ろしい孤独を回避するために、無意識から生成された対象とつながる空想を発展させたものと思われる。Aが生成した「イメージ（妄想的）の対象」は、孤独の苦しさや痛みを緩和させるために役だったが、同時に現実との接点を失った無意識的な空想の世界（精神病的な世界）に生きることにもつながったのである。

2，空想の対象と孤独感

Bは現実に存在する人物であるが、Aとは面識もなく、テレビやインターネット上の文章を見るだけの関係である。しかし、AはBと実際に会話をしたり、メールでやりとりしているような意識的・無意識的空想をThに繰り返し話した。例えばそれは、「Bに馬鹿にされる気持があったから、占いでBを支配した」「Bから現実を受け取り、自分の一体感と交換している」などであった。Bとの体験は、Aの無意識から生まれた空想の世界での体験であったが、Aはそれを客観的現実だと受け取っており、現実と空想の区別を失った妄想的な世界が展開していた。最初のうちThはAがこの妄想的な空想の世界にどっぷり浸かってしまうことに不安を感じたのであるが、何時かはこの妄想的な世界を卒業して客観的現実の世界に戻る必要はあるにしても、しばらくはBという空想の対象によってAの自己が支えられ、そこで体験されることもAの心の成長には大切なことであり、意味があるのではないかと考えるようになった。Aの無意識から生成されたBは、Aが愛着や怒りなどを投げつけても破壊されず、Aが激しい情動を安心して表現できる対象であり、Aを慰めもしたし、何時でもAが保持できる対象であり、生み出すも捨て去るもAの思うままの自己愛的で万能的な対象であった。そして何時でも必要に応じて取り出せるBの存在によって、Aの孤独感は随分和らげられたとThは考えている。また、AとBとの関係は、幼児のごっこ遊びや空想の世界での遊びを連想させた。

河合（1985）は、児童文学を題材にして、主人公がファンタジーの対象（動物や人間）との関わりによって心を癒し成長していく姿を生き生きと描いている。その主人公達がファンタジーの対象と出会うことになるのは、彼や彼女が親を亡くしたり、何らかの事情で親から引き離されるなど孤独を抱えている時である。例えば、ロビンソンの「思いでのマーニー」（松野正子訳・岩波書店）の主人公のアンナは、生後すぐに両親は離婚、再婚した母親は事故死、引き取って育ててくれた祖母も亡くなり施設に収容されていた子どもである。ある夫婦に引き取られ、転地療養に行った先でアンナは空想の対象マーニーと出会うことになる。もちろんアンナはマーニーが空

想の対象だとは思っていない。Aと同じように現実の対象であると思っている。Winnicott（1971）は、移行現象が起きるとき、「自分の身体の部分でない対象を利用しても、それが外的現実に属していることをまだ十分には認識できない」と述べているが、ここでも同様の現象が生じているものと考えられる。

AがBとの間で体験していたように、アンナもマーニーと話し合い一緒に遊ぶ。またアンナは自分の心の中に秘めていた親への怒りをマーニーに語り、マーニーに激しい怒りや恨みをぶつけ、許しを経験し癒されていく。河合（前出）は、このアンナの経験した「激しい怒り、うらみと、それに続く許しの感情」は、彼女が癒されてゆくためには必要なものであると述べているが、Aも同様に、Bとの間で愛着や怒り嫉妬、優しさなど様々な感情体験をしていた。この感情体験はAに実感をともなって取り入れられ、様々な情動を受け入れていく素地を作ることに貢献したのであろうし、他者との間でそれが共有されることを学ぶことにも繋がったものと思われる。その後アンナは空想の対象であるマーニーを手放し、現実の対象と関わることが可能となり、主観の世界から客観的現実の世界に楽しさを見いだすようになったのである。マーニーがアンナの内的な世界と外界の中間領域にあって、内界と現実を繋ぐ役割を果たしたのと同様に、Bの存在もAにとって、Aの無意識から生成された空想の対象として存在し、自分でない所有物、つまり移行対象（Winnicott前出）として存在し、Aの内界と現実の中間領域でその両者を橋渡しする機能を果たしたものと思われる。Winnicott（前出）によれば、移行対象は現実を受け入れられる能力が備わっていない状態と、備わる状態の中間で機能し、現実を受け入れられるようになればリンボ界（死後に住むところ）に追放されてしまうという。アンナの場合も、自分を独りぼっちにして死んでしまった母親を許し、全てを受け入れた時、命の危険が伴う体験と共に、移行対象として機能した空想の対象マーニーは消え去ったのである。Aは、ようやく無意識的空想と意識的想像の違いに気づき始めたところで、まだ主観から客観へと進む途上にいるものと思われる。河合（前出）は、「魂の次元に至る深い癒しの仕事が行われるとき、その人は、精神病や自殺や事故死など危険きわまりない世界」を彷徨うことになると述べ、守りとなる人や自然の重要性について言及している。アンナがマーニーとの間で激しい情動を表出し、命の危険を伴う体験をしながらもこの世に留まることができたのは、ペグ夫妻やミセス・プリンストンが、「環境としての母親」（Winnicott, 前出）のような存在として機能したことが大きかったものと考えられよう。

以上述べてきたように、孤独な状態にある魂は無意識から生成される空想の対象と結びつく。それは孤独を否認し、孤独感によってもたらされる不安や恐怖に対する防衛としての意味合いも含んでいるが、一方で空想の対象との関わりを通して様々な情動体験を促す。そしてそれは実感を伴った感覚や退行して遊べるようになる心の状態をもたらす。また内的世界を豊かなものにし、心の成長にも寄与するものと思われる。無意識の空想は、防衛の機能と同時に、移行対象としての役割を担っているといえるのではないだろうか。

3，独りでいられる能力

Searles（1960）は、退行について「充分な満足、安全、平和、身体的、心理的強さなどを得るために、ずっと幼い時期の関わりを獲得しようとする個人の追求を表している」と言い、それによって「乗り越えられなかった特定の障害を克服しようとする新たな試み」でもあると述べている。人は不安や恐怖を感じた時、母親のお腹の中にいた頃や、乳幼児期の誰かと繋がって温か

い気持ちになれた時に帰ろうとするのかもしれない。そしてそれはただ単に不安や恐怖を回避するという防衛的側面のみを意味しているのではなく、退行することでエネルギーを補給し、不安や恐怖を乗り越えていこうとする試みでもあると思われる。セッション１のAの言動をこの観点から捉え直すならば、Aは退行して赤ん坊として生まれ出る前、つまり、母親の子宮にいて何時も母親との一体感の中に包まれていた頃に戻りたい願望をもっており、それが無意識的空想として表現されていたと言えるのではないだろうか。またWinnicott（1958）によれば、強烈な孤独感の経験は、「頼れる存在としてあるべき母親との「自我の関係性」の経験を欠いたために、侵襲を経験したこと」と関わるという。セッション１のAのあり様は、お腹を空かせたまま放置された赤ん坊が、火がついたように泣いている姿を思わせた。人間の赤ん坊は、授乳し世話する母親や養育者なしには生存できない。授乳されないことは死を意味する。この時期のAにとっての授乳とは、頼るべき存在としてのThとの愛着関係であろう。それがThの不在によって失われた時、Aにとって死を意味するくらいに恐ろしく苦痛な侵襲を体験していたと思われる。また、面接の休みは、Th-Clの関係性の中で培われてきたAを抱える器の破綻としても体験されていたのであろう。それは抱っこされていた腕や抱えられていた膝の喪失であり、温もりのある母親の身体の喪失であったと思われる。抱える器の破綻はAを孤独状態に陥らせ、不安と恐怖の世界に一人ぼっちで放り出されたように体験されていたものと思われる。その苦痛な現実を回避するためにAはプリミティブで破壊的な空想や妄想的な空想を生成し、内的対象としてのThや自己対象としての自分の身体と繋がろうとしたものと考えられる。

セッション２になると、Aは寝ころんでThの靴に触れるなど、退行が見られるようになった。それはまるで、幼児が母親の傍に寝ころび、甘えたり拗ねたりしながら遊んでいる姿を彷彿とさせるものであり、AとThはゆったりとした柔らかい時間として面接を体験していたように思う。Winnicott（1958）は、「一人でいられる能力は誰か他の人と一緒にいて一人でいるという体験を基盤」にするという。AがThの足下で寝ころび退行できた事は、Thに守られた空間にThと二人でいて一人でいられる体験の萌芽であったと思われる。空想の対象との間で体験されていた情動や本能衝動が、身体を持つ実体としてのThとの触れあいが、またリアリティのある人間としてのThとの関わりあいが、Aの孤独感を和らげ、現実のThと繋がることを可能にしたといえよう。この体験が、「Thからも過剰に愛されて一体みたいに思っていた」との語りにつながったものと思われる。この語りには、空想の世界で一体であると思っていたが、現実には違っていたという脱錯覚が生じたことが表現されている。また、「イメージのThはいつも側にいてくれる。イメージが遠のくとThが知らない人になった気がする」という語りも、空想の世界にどっぷり浸かっていたAが、イメージのThと現実のThの違いについて認識することが可能になった事を表している。甘えを保持できる心的空間や、内的対象としてのThとの体験が、現実に触れることを可能にし、それはAが一人であることを幾分かでも心に受け止める事を促したのではないだろうか。そしてそれが「独りぼっちで寄る辺がない」と、孤独を心で味わえるようになることとも繋がっていたものと思われる。

Ⅳ　無意識から生成される空想にみる孤独感

孤独は、人間存在にとって普遍的なテーマである。そして文学や哲学は、心理学よりも古い時

代からこのテーマに取り組み、論考し、表現してきた。筆者も孤独の在りようについて考えるにあたって、これらの知見も援用して論じたいと思う。

孤独の恐怖や破壊的な側面について、芥川（1986）は、「死んでしまうよりもほかはない」ような「孤独地獄」として記述している。また、ロシアの哲学者ベルジャーエフ（Berdyaev前出）は、「孤立的な精神化されていない情熱は果てしない欲望を生む。このような情熱は人間の霊的中心との断絶の結果であり、さらにはこの中心と生命の源泉との裂け目である」と言い、孤独が人間存在の根源に深い亀裂を生じさせる事を示唆している。さらに、孤独に陥った時「妄想は、解決しがたい葛藤から逃避しこれを軽減するのにしばしば有利な方途でありうる」と述べている。Thの不在にともなってAの精神内界に生じていた無意識的な空想は、まさに霊的中心と生命の源泉の裂け目から生じたような激しいものであり、孤独地獄を回避するために破壊的な妄想の世界を生み出していたと言うこともできるのではないだろうか。Klein（前出）は分裂病者の孤独について、迫害不安による妄想的危険や引きこもりによる対象関係の破断にその要因を認めている。前者は「外的な良い対象にも、内的な良い対象にも、自分自身の自己にも頼ることができず、自分は苦しんでいるのに一人で放置されているという感情を増大させ、敵意に満ちた世界に囲まれているという意識」から生じ、後者は「自分自身をバラバラだと感じ、自他を混同したり、自己の良い部分と悪い部分の区別も、良い対象と悪い対象の区別も、外的現実と内的現実の区別もできず引きこもる」状態を作りだし、対象関係をつくる能力や、他者からの安心感や温もりを得る能力が破壊され、孤独になると論述している。セッション１のAの内界で生じていた妄想的な表出（欲動、空想、身体化）は、Kleinが描き出した迫害不安による妄想的危険から生じた孤独に近いものであったといえるのではないだろうか。Aの孤独は、Thとの愛着関係がThの不在によって失われ、現実の良い対象であるThを失うことになったのであるが、内的な良い対象としてのThは未だ保持されておらず、またA自身の自己にも頼ることができず、苦しんでいるのに全くひとりぼっちで放置されていると感じたことから生じていたものと思われる。そして、独りぼっちに耐えられないAは、孤独を回避するために無意識の心的空間から空想を生成するのであるが、その空想はサディステッィクで破壊的なものであり、Aの自我はそれを到底抱えることは出来ず、精神病的な反応を示したものと考えられる。

孤独の破壊性と同時に、その孤独が人との交わりや情へと繋がることを論じた岡田（2000）は、松尾芭蕉の「嵯峨日記」や西行の「山家集」を取りあげ、「自己の孤独が自己の底の方から起こってくる時、孤独の方が自己の主となります。「風狂」と言えるものに自己が捉えられ、深く動かされるようになるからです。風狂は、自我の殻を破って顕れますから、自己の破壊をもたらすこともあります。しかしその恐ろしさは、人との交わり、自然との出会いを開いていく情の動きでもあります。」という。この「風狂」を「無意識から生成される空想」と読み替えることも可能ではないだろうか。

上述したように、Aの孤独を、文学や哲学から見た孤独の視点からも考えてみたが、この様な孤独体験を克服し、それを創造的な仕事と結びつけた例として、Jungの仕事があげられよう。ユング自伝（1963）によれば、ユングは父とも思っていたフロイトと決別し多くの友人知人も離れ、専門家の組織からも孤立し、極度の孤独状態の中で、圧倒されるような幻覚や夢、空想、イメージといった「無意識内の空想」の力に捉えられ、「精神病におびやかされているのだと結論

を下した」というような妄想的で破壊的な精神状態になっている。まさに孤独な心の在りようが「無意識内の空想」を生成したのであるが、ユングはその無意識からのエネルギーに翻弄され、空想の力に圧倒されながらも、「情動をイメージに変換する」という治療的方法を見いだし、この状態から離脱している。ここに破壊的な空想が、創造的なものへと変換する妙が示されているといえよう。ユングによれば、この妄想的で精神病的な空想の世界から離脱できたのは、「家族と仕事」というこの世（現実）とのつながりを持ち続けたことが大きかったという。孤独の中で生じた空想が病理に向かうのか、創造に向かうのかという問いに１つのヒントを示してくれていると言えよう。内的仕事を行うためには、現実とのつながりを失わないこと、現実の足場をしっかり確保することの重要さが提示されたのであるが、これは、対象とのつながり、自我と自己とのつながりを如何に保つかということと深く関わるのではないかと思われる。

河合（2002）は、「自分の存在を超えるもの、あるいは、少なくとも自分の知的理解を超えるものを感じ取り、あくまでそれを避けることなく理解しようと続ける態度を「宗教的」であると述べ、ロバート・コールズ（1997）の書いた「子どもの神秘生活」の中からホピ族の少女の話を紹介している。「空がわたしたちのことを見ていて、私達の言うことを聞いてくれる。空は私たちに話しかける。そして私たちの返事を待っているの」という語りは、自分の意志や思考を超えた存在とのつながりや守りを感じさせる。目に見えなくてもこのような存在を身近に感じられたなら、孤独地獄を体験することもないのではないだろうか。また、Fromm.（1955）は、「人間は自然から現れ出でてきたが、自然は今も人間の住所であり故郷である。人間は、自然、すなわち動物や植物の世界に退行したり、それらと自分とを同一視することで、安全を見いだそうとする」と述べている。人が人とのつながりを失い深い孤独に陥った時、現実の対象とのつながりや空想の対象とのつながりだけでなく、自然との一体感によって守られている、自然に包まれているといった感覚体験を心に保持できるか否かも、心の健康にとって大きな意味を持つのではないかと思われる。

人は外的対象を喪失し誰とも繋がることがでずに孤独を感じた時、あるいは内的な対象も失って言語に絶するような孤独を体験した時、「人」、「超越した存在」、「自然」とつながり包まれることで孤独を回避し、安心感や心の安定を得ようとするのであろう。そしてこの機能がうまく作用するならば、精神病理をともなった症状を呈することも起こらないのであるが、それらが機能しなかった時、人は無意識から生成される空想の対象とつながり、その対象との対話を通して様々な情動を体験し、退行していくものと思われる。その内界と外界の中間領域で生じた体験が、新たな創造や心の変容をもたらすのであるが、空想が内的、外的対象とのつながりや包まれる体験の無いところで生じた場合、破壊的で妄想的なものになり、精神病的な世界に陥ってしまうものと考えられる。そして、空想の対象すら生み出すこともできなかった時、自分の外から声が聞こえる幻聴として、自分以外の姿をみる幻覚として、あるいは自分の意識の与り知らないもう一人の自分に解離するなど、精神病理を開花させることになるものと思われる。しかしこれは、孤独な心が「もう一人の自分」と繋がることで、孤独地獄（精神の破綻）から逃れようとする試みでもあると言えよう。

V　おわりに

羊水の中で守られ、母親という他者と一体であった世界から、臍の緒でのつながりを切断され、個として生まれ出で、外気に晒される。われわれ人間はこうして未熟児としてこの世に生まれ、他者からの世話がなければ生命を維持できない、非力で脆弱でよるべない存在である。生まれると同時に立ち上がり、自ら哺乳する対象（母親）を捜す他の動物とは異なり、他者の存在に生死を委ねていると言えよう。それ故世話をする他者の不在は死を意味する。一人ぼっちの孤独な赤ん坊は生存できない。この他者依存性こそが、われわれ人間存在が根源的な厳しい孤独と響きあうことになる一因とも考えられる。また、それ故に対象を希求するのであるが、その対象が得られない為に孤独になるのである。あるいは対象を失って傷つくことを恐れるが故に対象から距離を取り、孤独になるのであろう。そして、この孤独に耐えられない時、人は代わりとなる対象を求め、空想し、その空想の対象と結びつこうとする心のメカニズムがあるのではないだろうか。

母親の臍の緒とつながり子宮につつまれていた世界から押し出され、臍の緒のつながりを切られ、この世に生まれ落ちた人間が、この世で安心して生きていくためには、何かにつつまれ、何かとつながっている体験を心の中に留めている事が必要なのではないかと考える。

孤独感が精神病と結びつくような破壊的なものにならないためには、人・超越した存在・物などの対象と「つながること」や、自然や環境に「つつまれること」が必要であり、これらが人を孤独地獄から守ることになるものと思われる。私たち人間は、臍の緒を切ることで母親との一体感を喪失し、代りに両腕につつんでくれる母親を獲得したように、切ることとつながることを繰り返して生きていく存在なのかもしれない。そして喪失と獲得の間に、切ることと繋がることの間に孤独体験が生じるのである。そこには、切ること（喪失）、つまり孤独に耐えられない人は、誰ともつながる（獲得）ことができないという逆説がある。誰ともつながることのできない魂は、出口のない無意識の空想の世界を漂泊することになるのであろう。

文献

芥川龍之介（1986）: 芥川龍之介全集１　筑摩書房，75-80.

Berdyaev,N.A.（1934）: Solitude and Society　氷上英廣（訳）（1960）：孤独と愛と社会　白水社.

Freud,S.(1924)：Der Realitatsverlist bei Neurose und Psychose. 井村恒郎、小此木啓吾（訳）（1970）：フロイト著作集 第６巻 人文書院，316-319.

Fromm,E(1955)：The Sane Society. Rinehart&Company New York，48-49.

Fromm-Reichmann,F.(1959)：Loneliness. Psychiatry,22 早坂泰次郎訳（1963）：人間関係の病理学 誠信書房，1-15.

Isaacs, Suzan.(1948):The Nature and Function of Phantasy: International Journal of Psycho-Analysis,29　松木邦裕（編・監訳）（2003）：対象関係論の基礎　新曜社，73-97. .

Jung,C.G（1963）:Memories,Dreams,Reflections 河合隼雄、藤縄昭、出井淑子（訳）（1972）：ユング自伝1　みすず書房.

河合隼雄（1985）：子どもの本を読む　光村図書.

河合隼雄（2002）：日本人と日本社会のゆくえ　河合隼雄著作集第Ⅱ期11巻　岩波書店，372-375.

Klein,M(1963)：Envy and Gratitude and Other Works. The Hogarth Press Ltd. London　橋本雅雄（訳）（1996）：羨望と感謝　誠信書房，179-194.

Moustakas,C.E.(1972)：Loneliness and Love. Prentice-Hall.Inc,New Jersey.U.S.A片岡康・東山紘久（訳）（1984）：愛と孤独　創元社.

岡田勝明（2000）：開かれた孤独へ　世界思想社.
落合良行（1999）：孤独な心－淋しい孤独から明るい孤独へ－　サイエンス社.
Peplau,L.A.／Perlman,A(1982)：Loneliness: A Sourcebook of Current Theory, Research and Therapy. 加藤義明（監訳）(1988)：孤独感の心理学　誠信書房.
Searles,H.（1960)：The Nonhuman Environment 殿村忠彦、笠原嘉（訳）(1988)：ノンヒューマン環境論　みすず書房.
清水学（1999）：思想としての孤独　講談社選書メチエ.
斯波六郎（1990）：中国文学における孤独感　岩波文庫.
Storr,A（1988)：Solitude　吉野要（監訳）(1999)：孤独　創元社.
Sullivan,H.S.(1953)：the Interpersonal Theory of Psychiatry. New York. Norton.
Winnicott,D.W（1958）：The Maturational Processes and the Facillitating Environment. The Hogarth Press　牛島定信（訳）(1977）：情緒発達の精神分析理論　岩崎学術出版，21-31.
Winnicott,D.W（1971）：Playing and Reality 橋本雅雄（訳）(1979)：遊ぶことと現実　岩崎学術出版，1-35.

（臨床実践指導学講座　博士後期課程3回生）

（受稿2007年9月7日、改稿2007年11月30日、受理2007年12月12日）

A Study of the Sense of Loneliness Observed in Imagination Generated by the Unconscious: Based on a Case of Clinical Psychology Practice

NEMOTO Mayumi

A sense of loneliness exists in clients with psychiatric symptoms and psychological problems. Their sense of loneliness is considered linked to both the pathology of their psychiatric disorders -- such as schizophrenia or depression -- and their creation of new world views, such as new insights and discoveries. In this study, the author discusses the human experience of loneliness based on psychotherapy sessions in clinical practice with a client.

When people experience true loneliness, they attempt to avoid it by linking to imaginary objects generated by the unconscious, thereby defending themselves from the anxiety and fear caused by loneliness. The imaginary objects, as transitional objects, also have a function in linking the objective and subjective worlds. The author discusses the importance of; (1) `linking' to internal and external objects just as an embryo is connected to the mother's womb by an umbilical cord, and (2) `being surrounded' by the environment (i.e., people, Nature) just as an embryo is surrounded in amniotic fluid in the womb, to protect it from destructive loneliness and help in returning to reality from the imaginary world.